こどものまなざし

2023 年 9 月
<11 号>

～地域に出向いて支援する～

乳幼児教育相談では、本校にお子さんが来て相談を行う以外に、所属する保育所・幼稚園などに出向いて相談を行うことがあります。また、まだ保育所等に通っていないお子さんの場合は、地域の保健センターなどの場所をお借りして、保護者さんや保健師さんと一緒に相談をすることもあります。

生後半年くらいのお子さんでは、一生懸命に寝返りを披露してくれる子もいたり、こちらが持参した光るおもちゃや音が出るおもちゃを不思議そうに目で追う様子を見せてくれたりすることもあります。

医師から見えにくさがあることを指摘されると、保護者はお子さんのこれからについてとても不安を感じてしまうものです。私達はその気持ちに寄り添いながら、どんなおもちゃだったら興味を示すか、どのくらいの距離だと見ようとするか、色のコントラストをはっきりさせたおもちゃに手を伸ばすか、さらには、外と室内の明るさの違いを感じているか、などを把握していきます。

自分でハイハイしたり歩いたりして移動ができる段階になれば、視覚的な見えにくさを補うために、触って分かる、聞いて分かるといった他の感覚を用いて、身の回りの状況が分かりやすくなるよう工夫します。例えば、部屋の出入り口などには、その手前に床と材質の異なるマットを敷くなどして、手がかりならぬ足がかりにします。もちろん、ぶつかりやすい所は、クッション材を施すなどの工夫は欠かせません。

加えて、イスを出しっぱなしにしないようにしたりやゴミ箱を移動したりしていて、子どもが通りそうなところに置かないよう注意してください。子どもの好きなおもちゃなどは、いつもと同じ場所に片づけておけば、また遊びたいという気持ちにつながりやすくなります。せっかく歩く気持ちがあるのに、つまずいて嫌な思いをすると歩きたいという気持ちがなえてしまいかねません。

★保育所・幼稚園訪問★

地域の保育施設等に在籍しているお子さんに対して、保護者からの要望に沿って訪問させていただくことがあります。お子さんの園での様子を参観させていただき、担任の先生方と情報交換や工夫の手立てについて話し合いを行います。

多くの園では、見えにくさを抱えるお子さんを受け入れる経験が少ないため、先生方は不安に感じられることもありますが、どの園に伺っても先生方は熱心かつ丁寧にお子さんに接しておられて、とてもありがたいと感じることばかりです。また、子どもも私たちの心配をよそに、実にのびのびと過ごしている様子に驚かされることもあります。

在籍園への訪問は、年度をまたいで複数回行うこともあります。そうすると、前回の訪問の時には見られなかった成長があり、行動の範囲や遊びの幅が広がっていたりする姿を見ると、改めて子どもの成長のたくましさを感じます。